

論文

マーティン・ルーサー・キング・ジュニアの「革命」について The Vision of “Revolution” of Martin Luther King, jr.

レイシズム、経済的搾取、軍事主義という「三位一体の悪」を越えて
Beyond the “Triple Evils” of Racism, Economic Exploitation, and Militarism

福本 圭介
FUKUMOTO Keisuke

キーワード： M.L.キング、革命、レイシズム、経済的搾取、軍事主義

Key words： Martin Luther King, jr., revolution, racism, economic exploitation, militarism

1 はじめに

マーティン・ルーサー・キング・ジュニア (Martin Luther King, jr. 1929-1968) (以下、キングと略記) は、1950年代中盤から1960年代に続くアメリカ南部の公民権運動において重要な役割を果たした黒人牧師としてよく知られている。1963年のワシントン大行進で行ったスピーチにおける “I Have a Dream (私には夢がある)” の一節はことに有名であり、1964年には「アフリカ系アメリカ人の公民権を求める非暴力の闘争」が評価されてノーベル平和賞を受賞している。アメリカ合衆国においても彼の業績は評価され、1986年より1月第3月曜日はキングの業績を記念するメモリアル・デーとして連邦政府が定める国民祝日 Martin Luther King Day である。しかし、ここで問題としたいのは、キングをめぐる記憶の内実である。キングの業績は現在、どのようなものとして理解されているだろうか。キングの誕生日をメモリアル・デーとする法案は、1983年にアメリカ連邦議会で可決され、ロナルド・レーガン大統領の署名により成立した。この成立時にレーガンが述べた所見 (1983年11月2日) は、キングをめぐる「公的な記憶」の内容を象徴しているとして、米国黒人史を専門とする黒崎真は次のように要約している。

レーガン大統領は、まず幼少期のキングの法的人種差別体験、モントゴメリーのバス・ボイコット運動に触れ、次に「バス・ボイコット後の数年間、キング牧師は法的平等を生涯の仕事とした」と述べ、非暴力の教えの堅持、ワシントン行進での「私には夢がある」演説、ノーベル賞平和賞受賞に触れる。そのうえでレーガン所見は、一気に68年のキング暗殺にまで飛ぶ。そして、キングは暗殺されたが、彼の活動は六四年公民権法と六五年投票権法に結実し、アメリカは永久に変わったと述べるのである¹。

黒崎も指摘するように、レーガンの所見からごっそりと抜け落ちているのは、1965年の投票権法成立後から1968年のキング暗殺までのキングの苦難に満ちた3年間の歩みである。その時期、キングの目の前には、アメリカ北部において多発する大規模な都市暴動、その背後にある大都市の「ゲットー」における深刻な貧困状況、さらには政府が軍事的介入を深めるベトナム戦争といった

圧倒的な現実があった。キングはこれらの巨大な「暴力」に向き合いながらその思想と行動を深め続けたが、その歩みがまったく言及されていないのである。

1965年以降、キングは、北部大都市のゲットーにおける貧困の問題に本格的に取り組み始める。また、1967年春にはベトナム戦争反対の立場を明確に打ち出していく。こうしたなかで、キングは、アメリカ連邦政府のみならず、主流のメディア、公民権運動を支えた団体や黒人たちからすら批判されるようになっていく²。しかし、キングはこの一見孤立を深めるかに見える時期に、社会的に排除された黒人たちをアメリカ社会に「統合」するという従来のヴィジョンから、世界的な脱植民地化（decolonization）の動きと連動しつつ、アメリカ社会の既存の価値観や社会構造そのものを根本的につくりなおすという「革命」のヴィジョンへと自らの思想を深化させていくのである。私は、このキングの生成変化のなかにこそ、われわれが真に継承し、記憶すべきものがあると考えている。しかし、このようにラディカルになっていくキング——連邦政府のベトナム戦争や他国への軍事介入に反対し、資本主義の経済体制すら根本的に問い直す必要があると主張するキング——が、レーガンの所見に象徴される「公的な記憶」からは完全に排除されているのである。

黒崎は、1968年のキング暗殺事件に触れ、誰がキングを殺したかを考えるだけでなく、何がキングを殺したかを考えることが重要だと指摘している³。つまり、実際の実行犯やその共謀者を探すだけでなく、キング殺害を可能にした社会的コンテクストを考えることが重要だということである。同じことが、キングをめぐる記憶の殺害についても言えるだろう。何が、キングの最後の闘いの記憶を封じ込めているのか。これを考えるヒントは、レーガン大統領の所見の結論部にある「アメリカは永久に変わった」という言説にあるように思われる。これは賛辞のようでありながら、キングの思想と運動を巧妙に封殺する言説である。キングは、死の直前に至るまで、それとはまったく逆のことを主張していたからである。「アメリカよ、汝は生まれ直さなければならない」⁴と。キングは、「革命」の必要性、つまり、アメリカの「全構造が変わらなくてははいけない」⁵ことを懸命に主張するなかで殺害されたのである。ロナルド・レーガンが新自由主義的な政策を大規模に推進した大統領であることは忘れてはならない事実である。私たちは、現代の支配的な資本主義のイデオロギーこそが、「もう一つの世界は可能である」というヴィジョンを永遠に埋葬するために、キングを賛美し葬ったのではないかと疑うべきだろう。

本稿では、キングの最晩年の「革命」のヴィジョンをあらためて掘り起こすための基礎的作業として、彼の最晩年の著作とスピーチのなかでしばしば言及される「三位一体の悪」に光をあてる。キングは1967年8月16日のスピーチ「われわれはここからどこへ行くのか？」のなかで、「社会全体を問い直す」ことについて、以下のように述べている。

兄弟愛の王国（the kingdom of brotherhood）は、共産主義のテーゼの中にも、資本主義のアンチテーゼの中にも見出されず、より高次の総合のなかに見出されます。それは、両者の真理を合わせたより高次の総合のなかに見出されます。私が社会全体を問い直すという時、究極的には、レイシズムの問題、経済的搾取の問題、戦争の問題はすべて結びつき合っているのだと理解することを意味します。これらは、相互に関連した三位一体の悪なのです。⁶

ここでキングは、「兄弟愛の王国」を実現するための「革命」のヴィジョンを極めて簡潔に語っている。キングにとって、アメリカが抱えた問題の核心には、レイシズム、経済的搾取、戦争（軍事主義）という三つの悪が相互に結びつき合った「三位一体の悪」⁷があり、「革命」とは、この暴力的なシステムを根本的につくり変えることだったのである。では、歴史的に形成されたこの社会

的構造物は、具体的にどのようにイメージすればよいだろうか。本稿では、本格的な研究の準備作業として、以下、キングの最晩年の著作である『黒人の進む道』(*Where Do We Go from Here: Chaos or Community?*, 1967)、『良心のトランペット』(*The Trumpet of Conscience*, 1968)、あるいは、彼が生前に行ったいくつかの重要なスピーチ「ベトナムを越えて」(*Beyond Vietnam*, April 4, 1967)、「われわれはここからどこへ行くのか?」(*Where Do We Go from Here?*, August 16, 1967)等をもとに「三位一体の悪」の内実を吟味し、この短いパッセージの中に凝縮されたキングの「革命」のヴィジョンを素描したい。

2 終わらない植民地主義と「三位一体の悪」

「三位一体の悪」は、どのように歴史的に誕生し、形を変えながら生き延びてきたのだろうか。キングはそれを体系的に叙述しているわけではない。しかし、本章では、キングの複数の著作やスピーチで語られた関連する記述をベースにして、「三位一体の悪」をキングがどのように具体的にイメージしていたか、奴隷制プラテーション、20世紀の大都市のゲットー、ベトナム戦争という3つの観点から再構成したい。

2-1 奴隷制プランテーションのなかの「三位一体の悪」

キングにとって、「三位一体の悪」とは、レイシズム、経済的搾取、さらには軍事主義が、相互に関連し、結びついた構造物だが、そもそも「レイシズム」をどのように理解していただろうか。これについて、キングは、『黒人の進む道』のなかで、ジョージ・ケルシー (George Kelsey) の『レイシズムと人間のキリスト教的理解』(*Racism and the Christian Understanding of Man*) から以下のような一節を引用して自らの考えを表明している。

レイシズムとは、正当化の装置である。それは、ひとつの信念として出現したのではない。それは、植民地主義や奴隷制のなかに表現された政治的・経済的な権力の布置をイデオロギ的に正当化するため出現した。しかし、優等な人種という観念は、その意味と価値を次第に強めてゆき、それが出現した歴史的な関係構造を越えて、人間存在そのものを指し示すようになった⁸。

キングにとって「レイシズム」とは、人々の偏見が勝手につくり上げた信念ではなく、植民地主義や奴隷制を支えていた暴力的、抑圧的な「関係構造」をイデオロギ的に正当化するためにつくられた「装置 (device)」だった。つまり、政治的、経済的に支配する側にいる人々が、本来なら道徳的に許容できない暴力的な権力関係 (社会構造) を正当化、維持するために「人種」という観念を発明としたということである。

キングは、アメリカにおける奴隷制の誕生と成長の基礎を何よりも経済的なもの、経済的な利潤追求として理解していた⁹。キングの考えでは、大英帝国は17世紀の初めまでに北米のマサチューセッツから西インド諸島まで大西洋岸沿いに植民地を建設していったが、その目的は、英国の製造業のための原材料を調達するだけでなく、英国で製造された商品の市場とするためでもあり、さらには、世界貿易に従事していた英国船舶が扱う商品の供給地とするためであった。したがって、植民地では、大量の米、砂糖、綿花、タバコなどを生産しなければならず、やがて農園 (プランテーション) の経営者たちは、輸入したアフリカ人たちを生涯にわたって搾取できる奴隷制度を要求す

ようになる。こうして、1650年までに、奴隷制度は「国家の制度（a national institution）」として法的に確立されるが、それは植民地における「新しい経済政策（new economic policy）」として立ち上げられたのである¹⁰。

そのなかで、アフリカ人たちは、いっさいの権利をはく奪され、国家の法律によって「財産」という地位を強制された。これについてキングは、以下のように述べている。

このシステムの下で、人間が、財産なき財産（propertyless property）へと縮減された。黒人たちは新世界の富の創造者だったが、いっさいの人権と市民権をはく奪された。そしてこのような権利剥奪（degradation）は、政府の諸制度によって容認され保護された。利潤を生みだす商品を生産するという一つの目的のためにである。そして、その利潤は、私的なものとして盗まれていった¹¹。

また、キングは、このように多大なる利潤を生みだす奴隷の「地位」は、当時考えられる最も厳格で野蛮な政府の「警察力（police power）」によって強要されたことを指摘している¹²。植民地を建設し、そこで奴隷制に基礎をおく経済的搾取のシステムを維持するためには、軍事力・警察力が必要不可欠だったのである。しかし、そのシステムを維持・成長させるには、それだけでは不十分だった。キングは次のように述べている。

奴隷制度の成長にともない、人々はこれほどまでに経済的に利潤を生みだす制度は、道徳的にも正当化されうのだと自分たちを納得させなければならなかった。利潤を生みだすシステムに道徳的な是認を与えようとする試みは、白人至上主義（white supremacy）の教義を生み出した¹³。

白人至上主義の教義を生み出し、広め、発展させたのは、裕福な商人や農園経営者だけでなく、影響力のあるキリスト教の牧師、さらには、国家を代表する大学の歴史家、政治学者であり、自然科学の分野でも、人類学者や医学者が「人種」の理論を発展させていった¹⁴。宗教、科学、人文学は、白人至上主義の発展に協力し、まもなく白人優越の原則は、あらゆる教科書に書き込まれ、あらゆる説教壇で説教されるようになった。キングは、このような事態について、白人優越の原則が「文化の構造上の一部（a structural part of the culture）」になったと表現している¹⁵。人々は、白人至上主義を「嘘」の合理化としてではなく、最終的な真実の表現として受け止めるようになっていくのである。

こうして、奴隷制プランテーションという経済的搾取のシステムは、国家による軍事主義（軍事力・警察力）だけでなく、レイシズム（白人至上主義）という「装置」によっても構造的に支えられる「三位一体」のシステムとして設立されたのである。

2-2 ゲットーというシステムのなかの「三位一体の悪」

周知のように、アメリカ合衆国における奴隷制は、南北戦争後、1965年に憲法修正第13条が採択され廃止された。また、続く、憲法修正第14条（1968年成立）、15条（1870年成立）によって、憲法上は黒人にも市民権と選挙権が保証された。しかし、憲法上規定された市民的平等を実質的に保障する経済政策がないまま、レイシズム、経済的搾取、軍事主義が相互に結びついた「三位一体の悪」は形を変えて継続されていく¹⁶。やがてアメリカ南部においては、20世紀の初めまでに、「ジム・

クロウ」と呼ばれる人種隔離の法体系がつくり上げられ、選挙権も実質的に否定されるなかで、黒人は社会生活上での平等を否定され、経済上も下層の地位を強いられる¹⁷。1950年代半ばから始まる公民権運動は、南部に形成されたこの「新しい形態の奴隷制度」¹⁸を解体しようとする試みであったと言えるが、キングは、南北戦争後に北部へ移住し大都市のスラム（キングは、しばしば「ゲットー」と呼ぶ）に追いやられた黒人たちをからめとったシステムについても「20世紀の奴隷制」だとして次のように語っている。

この「ゲットーの」システムは、劣等の地位を永続化し、誰も欲しくない仕事を黒人たちにあてがうよう共謀し、その結果、一般社会に大量の非熟練の安価な労働力を創り出す。黒人たちの命は、すでに子ども時代に、精神的にも、感情的にも、身体的にも押しつぶされており、そうしておいて社会は、劣等性という神話を発展させ、一生涯続く形態の搾取に信任を与えるのである。これは、20世紀の奴隷制として定義するほかない¹⁹。

キングが語っているのは、ゲットーという実質上の人種隔離が居住地域における教育の格差を生み、教育の格差が職業選択を制限し、そこで生み出される貧困がまた次世代の教育の格差につながっていくという悪循環である。こうして黒人たちはゲットーから抜け出せず、非熟練労働からも抜け出せない。これが「劣等の地位」の永続化である。しかし、白人社会はこの黒人たちを閉じこめるシステムの中で恒常的に安価な労働力を手にするのである。

社会保障に依存せざるをえない黒人は財産を持てず、車などの移動手段を所有できないため、黒人居住区の外に買い物に出ていくこともできない。ところが、キングによれば、彼が1966年から居住を始めたシカゴの黒人居住地区ローンデールでも、アパートの家賃は郊外の白人が住む地域よりも高く、スーパーマーケットの商品の価格も割高だった²⁰。こうして、いったんゲットーに閉じ込められると、黒人たちは、安価な労働力として一生涯搾取されるだけでなく、黒人居住区で営業する商人たちによって「大規模な強奪 (wholesale robbery)」²¹を受けることになる。したがって、キングから見れば、アメリカ南部のジム・クロウ法によって人種隔離された社会だけでなく、北部のゲットーを基盤として人種隔離された社会も一種の「奴隷制」だったのである。

しかし、この一節において、あらためて注目したいのは、ゲットーという経済的搾取のシステムにおける「レイシズム」の機能についての言及である。ここで、キングは、黒人たちの命は、ゲットーのなかで、精神的にも、感情的にも、身体的にも押しつぶされており、そうしておいて社会は、「劣等性という神話」を適用し、一生涯続く形態の搾取に「信任 (credence)」を与えるのだと述べている。これはいったい何を意味するだろうか。

キングは、『黒人の進む道』において、ゲットーの「解剖学 (anatomy)」²²について考えるとき、しばしば、W.E.Bデュボイス (William Edward Burghardt Du Bois, 1868-1963) の『夜明けの黄昏』 (*Dusk of Dawn*, 1940) の一節を思い出すのだとして、デュボイスの文章を長文にわたって引用している。デュボイスがそこで描いているのは、白人社会によってゲットーに閉じ込められた黒人側から見た世界の寓話的表現である。長文になるが、引用する。

カースト的な人種隔離がもつ心理学的な意味を十分に他人に理解させるのは難しい。例えるなら、それは、迫り出した山の斜面の暗い洞窟から外を見ている人が、通り過ぎる世間の人々を見て、語りかけるようなものである。これらの墓に埋められた魂たちがいかに自分は自然な運動や表現、発達を妨げられているか、礼儀正しく、説得的に語りかけるようなものである。そ

の監獄からの解放が、たんなる礼儀や同情、手助けの問題ではなく、いかに世界全体への援助にもなるかを話すようなものである。人はこのように冷静に論理的に話し続けるが、通り過ぎる群衆は頭を向けることさえしないのだと気づく。あるいは、頭を向けたとしても、興味深そうにチラッと見ては歩き去るのだと。通り過ぎる人々は聞いていないのだということが次第に囚人たち（prisoners）の心にしみてくる。彼らと世間の人々の間には、目には見えないが、恐ろしいほど手ごたえのある分厚いガラス板があるのだということも。そうして内側にいる人々は狂乱状態になるかもしれない。叫び声をあげ、その障壁に対して体当たりするかもしれない。真空のなかで叫んでおり聞かれていないこと、その狂態は外からのぞき込んでいる人には実際こっけいに見えるかもしれないことには、混乱していてほとんど思い至らない。彼らは、あちらこちらで、血まみれになって傷だらけで障壁を突き破ることさえあるかもしれない。そして、気がつくと、目の前には、彼らの存在そのものにぎょっとして、おびえながらも、冷酷無慈悲な表情をした、圧倒的といってよいほどの群衆がいるかもしれない²³。（強調は筆者）

この印象的な一節を引用しながらキングが指摘しているのは、外部の白人社会をすべて見ているゲットーの黒人たちの視力とゲットーの内部の状態に気がつかない白人の盲目性の差異である。黒人側から白人側の世界は見えるのに、白人側からは黒人側の世界が見えない。デュボイスの描写によれば、両者の間には奇妙な「分厚いガラス版」があり、それは透明であり、すべてが見えているはずなのに、白人側からは黒人の世界が見えないのである。ここでは、二つの不可視性（invisibility）が描かれているといってよい。一つは、白人社会は、自らゲットーをつくり上げ、黒人たちを閉じこめ、搾取しておきながら、黒人たちの苦しみが見えないということである。白人側からは、黒人たちの被害が見えないのだ。もう一つの不可視性は、白人に自らの加害性が見えないということである。白人たちは、自らがゲットーをつくり上げ、そこに黒人たちを閉じこめ、そしてそこから利益を得ているのに、自らがやっている行為、その加害性が見えない。つまり、白人たちは、黒人たちの姿だけでなく、本当は自らの姿も見えていない。黒人たちが必死の抵抗としてガラス版を突き破り、白人の目の前に姿を現したとしても、白人側はそれに驚きと恐怖を感じるだけで、黒人たちの被害も、自らの加害性も、見えないのである。

デュボイスが描いた「分厚いガラス版」とは、（構造的）暴力をイデオロギー的に正当化する「装置（device）」としてのレイシズムを寓話的に表現したものだと言っていいだろう。この「分厚いガラス版」は、白人マジョリティによる搾取や収奪、あるいは社会的排除といった（構造的）暴力を見えなくする。もちろん、ゲットー化は、物理的・空間的な排除であり、それによって黒人たちの被害は白人マジョリティに見えにくくなるが、レイシズムという装置は、白人マジョリティの視力を屈折させ、何よりも白人自身の加害性を見えなくする。見えていながら、見えなくするのである。それは、いったいどのようにして可能なのだろうか。キングは、『黒人の進む道』のなかで「アメリカにおいて黒人であること」の意味を、次のように述べている。

アメリカにおいて黒人であることとは、（…）両足を切り落されてから、障がい者（a cripple）だと非難されることを意味する。また、それは、自分の父や母が日々の搾取の石や矢によって精神的に殺されるのを見ながら、おまえは孤児だと憎悪を向けられることを意味する²⁴。

ここで描写されているのは、レイシズムという装置が持つ責任転嫁のメカニズムである。「劣等性という神話」は、加害者の行為責任をどこまでも被害者に押しつけることを可能にするのである。

レイシズムは、本来、加害者が負うべき道徳的な責任さえ被害者側に押しつけ、暴力を行使している側に自らの暴力を見えなくさせるのである。レイシズムとは、「恐ろしいほど手ごたえのある分厚いガラス板」であり、黒人たちの命を「精神的にも、感情的にも、身体的にも押しつぶし」ながら、そのすべての加害性を被害者自身に責任転嫁する装置、他者の両足を切り落としておきながら、両足がないと相手を買め、両足がない相手を憎悪することを可能にする装置なのである。

私たちは、ここで、キングの最晩年の著作『黒人の進む道』が、黒人たちによる暴動が大都市で頻発するなか書かれていることを想起する必要があるだろう。キングは、空前の規模の都市暴動のただなかで、デューボイスを読み、思考していたのだ。アメリカでは、1964年以来、毎年夏になると大規模な都市暴動が発生していた。いわゆる「長い暑い夏」と呼ばれる事態である。黒崎真によれば、キングが『黒人の進む道』を書いた1967年には、暴動の数は150件に達し、7月23日には最大級の暴動がミシガン州デトロイトで起こっている。デトロイト暴動では、州兵では手に負えず、州知事の要請により連邦軍が投入され、死者は43人、負傷者は1200人、逮捕者は7200人、建物の放火と破壊は2000件を超えたという²⁵。デューボイスが寓話的に描写し、予言したように、黒人たちは、「血まみれになって傷だらけで障壁を突き破」ったが、白人社会はその「言語」が理解できず、おびえるだけであり、暴動という形で表現された構造的暴力に対する反発と抵抗は、軍勢力という国家の直接的暴力によって鎮圧されたのである。

経済的搾取、レイシズム、軍事主義が相互に結びつき合った「三位一体の悪」は、キングの目の前のゲットーというシステムのなかで脈打っていた。しかし、白人マジョリティには、何も見えていなかった。見えていながら、見えていなかった。では、いったいどのようにして、「分厚いガラス板」を解除することができるのか。後に述べるように、キングは、暴動ではなく、非暴力の大規模な市民的不服従にその可能性を見出していく。

2-3 ベトナム戦争のなかの「三位一体の悪」

ここまで、アメリカにおける奴隷制プランテーション、20世紀の北部大都市におけるゲットーという二つのシステムにおける「三位一体の悪」の具体的なありようについてキングの著作の記述をもとに再構成してきた。ここではさらにアメリカ政府が遂行したベトナム戦争という国家政策における「三位一体の悪」を検討したい。

キングは、暗殺のちょうど一年前の1967年4月4日、ニューヨークのリバーサイド教会で、「ベトナムを越えて」というタイトルの記念すべきスピーチを行い、ベトナム戦争に反対する立場を明確に打ち出した。しかし、先に述べたように、キングがベトナム戦争反対を訴えることに関しては、運動の内外から多くの反発があった。「反戦運動と公民権運動を一緒くたにするな (Peace and civil rights don't mix)」という声である²⁶。アメリカ連邦政府と白人リベラルの協力を得て公民権運動を推進してきた背景の中で、両者を敵にまわすキングの態度に運動を支えた団体の内部からも強い反発が出てくるのである。しかし、キングは、ベトナム戦争反対の立場を明確化していく。なぜ、キングはベトナム戦争に反対したのか。

重要なことは、キングにとって、公民権運動とベトナム反戦運動は、その根源において、そもそも切り離すことのできない1つのことだったということである。キングの思想のもっとも深いところには、「生きた神の子として生きる」というキリスト者としての使命があり、それは国家への忠誠を越えるものだった。キングには、神が愛する「弱き者たち、声なき者たち、祖国による被害者たち、祖国が敵と読んでいる者たち」のために語るといふ使命があった²⁷。しかし、それをキングの政治的な言語に翻訳するなら、ベトナム戦争は「貧しき者たちの敵」²⁸だからということになる。

キングは、ベトナム戦争を推し進めるアメリカ人の立場を次のような言葉で批判している。

私たちは、富裕な者たち（the wealthy）、生活を保障された者たち（the secure）の側の味方をしており、他方、貧しき者たち（the poor）には地獄を生みだしています²⁹。

これこそが、アメリカが主導するベトナム戦争についてのキングの基本的把握だった。つまり、アメリカ人は、富裕な者たちを富裕にする社会構造を守るために、軍事的に介入し、「貧しき者たち」の命や生活を犠牲にしているというのである。

ここで言及されている「富裕な者たち」「貧しき者たち」は、国境を越えて存在した。1945年以前、ベトナムはフランスの植民地であり、第二次世界大戦中は、日本軍によって軍事占領されていた。ベトナムの民衆は、宗主国や占領軍の支配下におかれ、長期にわたって搾取や収奪の対象だった。しかし、第二次世界大戦が終了した1945年にホーチミンを代表とするベトナムは独立を宣言する。ところが、フランスはこれを認めず、ベトナムを「再植民地化（recolonize）」しようとする戦争を始めるのである（インドシナ戦争、1946年-1954年）³⁰。アメリカはこのフランスの戦争を財政的に支え、戦争終結末期には戦費のほとんど全てを負担するまでになる。1954年にフランスが撤退した後も、アメリカは、共産主義の統一ベトナムが誕生することを嫌がり、南ベトナムに傀儡政権をつくり、現地の地主階級と結びついた非民主的な軍事独裁政権を支えていく³¹。アメリカは、資本主義の経済体制、社会構造を守るために、ベトナム国内の「富裕な者たち」とも結びつきながら、現地の「貧しき人々」を敵視し、その命や生活を犠牲にするのである。アメリカ政府は、ベトナム戦争は共産主義が国際的に拡大することを阻止するために必要な戦争なのだと主張した。しかし、キングは、この戦争を「貧しき者たちの敵」と見たのである。

アメリカが主導するベトナム戦争が犠牲にしたのは、ベトナムの「貧しき者たち」だけではなかった。アメリカ国内の「貧しき者たち」も、国境を越えて存在する「富裕な者たち」を富裕にする社会構造を守るための戦争の犠牲にされた。キングが指摘しているのは、第一に、アメリカの軍事費の拡大によってジョンソン政権が計画していた貧困プログラムが骨抜きにされたことである³²。アメリカ国内には4000万人規模の貧困者が存在したが、「豊かな社会」のなかの貧困を解決することを目的とした政策はベトナム戦争によって台無しとなった。また、さらに深刻な事態として、ベトナム戦争は、「貧しき者たちの息子や兄弟や夫を、他の階層と比較して異常なほど高い比率で戦争に駆り出し、死へと追いやっていた」³³。キングは、次のように述べている。

私たちは、アメリカ社会によって不具にされた（crippled）黒人の若者たちをつかまえて8000マイル離れた東南アジアでの自由を守るためだと送り出しているが、彼らは、自分が育ったジョージア州南西部やイースト・ハーレムでは自由など見たこともない³⁴。

「自由」を守るためという大義名分のもと、黒人は白人の二倍の比率で戦場に送り込まれ、戦死者に占める黒人の割合も人口比率の2倍に達していた³⁵。キングが現代の「奴隷制度」と呼ぶ場所に閉じ込められている黒人の若者たちが高い比率で戦場に送り込まれていたのである。したがって、キングにとってベトナム戦争とは、「裕福なる者たち」が自分たちに都合の良い社会構造を維持するために、その構造の被害者である「貧しき者たち」を犠牲にして遂行している国家政策だった。黒人の若者の中には、あまりに過酷な貧困の現実から抜け出すために軍隊に所属することを選択するものもいた。そして、今度は、そのような貧しき黒人兵士たちが、貧しきベトナムの民衆を「劣

等」な存在として蔑視し、殺戮していたのである³⁶。国境を越えた資本主義の体制を維持するための戦争には何重ものレイシズムが動員されていた。ベトナム戦争の背後には、まぎれもなくキングが指摘した「三位一体の悪」、つまり、経済的な搾取、レイシズム、軍事主義が相互に結びついた巨大な構造体があった。

3 キングの「革命」と脱植民地化の「世界革命」

3-1 「世界革命」とつながること

キングは、ベトナム戦争は、アメリカ社会が抱えた「はるかに根深いところにある病の徴候 (a symptom of a far deeper malady)」³⁷にすぎないと考えていた。つまり、根源的な「病」に対処しない限り、このような紛争は世界各地で今後も起こり続けるということである。もちろん、キングがここで言及している「病」の正体とは、私たちがこれまで検討してきた、レイシズム、経済的搾取、軍事主義が相互に結びつき合った「三位一体の悪」を指す。キングの考えでは、「三位一体の悪」は、アメリカ国内の経済的搾取のシステムやベトナム戦争といった国家の戦争行為のなかにあるだけでなく、米国企業の海外投資やそれを保護するための米政府の関与のなかにも存在し、国境を越えて世界的に組織化されていた。キングは、これについて次のように語っている。

1957年に外国に駐在していた思慮深いあるアメリカの政府高官は、アメリカは世界革命 (a world revolution) の間違った側に味方しているようだと言っていた。この10年、私たちは、鎮圧 (suppression) という1つの様式が出現するのを目にしてきた。ベネズエラにアメリカの軍事「顧問団」が駐留するのを正当化してしまったのがこの鎮圧の論理である。アメリカの投資を守るためには社会を安定させることが必要だとするこの論理によって、グアテマラではアメリカ軍が反革命的な行動 (counter-revolutionary action) を行っている。カンボジアにおいてアメリカ軍のヘリコプターが対ゲリラ戦で使われ、ペルーにおいてアメリカ軍のナパーム弾とグリーンベレー特殊部隊が反乱者との戦いに使われているのも同様の理由である³⁸。

ここで注目すべきは、キングが、アメリカ企業やアメリカ軍が中南米や東南アジアで展開する経済・軍事活動について、「世界革命」に逆行する行動として言及していることである。「世界革命」とは、第二次世界大戦後に活発化する世界的な脱植民地化 (decolonization) の動きを指すが、キングは、アメリカ企業の海外投資活動とアメリカ政府がそれを軍事的に保護しようとする動きを「世界革命」を阻害する「反革命的な行動」だとして批判しているのである。これは、逆に言えば、キングが、それらの動きを新たな「植民地主義」、あるいは新たな「帝国主義」の推進・拡大として把握していたということを意味する³⁹。中南米や東南アジアでは、アメリカ企業の経済活動を阻害する勢力を「鎮圧」するという名目でアメリカ政府による軍事的な関与が行われ各地の民衆の自由を求める運動が弾圧されていたが、キングは、これらの経済・軍事活動を終わらない「植民地主義」の問題として捉えていたのである。

他方で、キングは、アメリカ国内で「三位一体の悪」と闘おうとする黒人たちの対抗運動を「世界革命」という世界的な脱植民地化の動きの一部として把握していた。キングにとっての「革命」とは、アメリカ一国における社会構造の変革であるだけでなく、「世界革命」という国境を越えた民衆の運動と連動する「革命」だったのである。キングは次のように語っている。

今は、革命の時代である。世界のいたるところで、人々は古い搾取と圧制のシステムに対して反乱を起こしている。そして、脆弱なる世界の内側からは新しい正義と平等のシステムが生まれつつある。(…)「暗闇のなかでいた人々は偉大なる光を見た」。西洋 (the West) に生きる私たちは、これらの革命たち (revolutions) を支援しなくてはならない。安楽、自己満悦、共産主義への病的な恐怖、さらには不正義に順応しがちな私たちの傾向ゆえに、近代世界の革命的 spirit をあれほどまでに生み出した西洋の国々が、今や反革命派の頭目になっているのは悲しいことだ。(…) この時代の唯一の希望、それは、革命の spirit を取り戻し、時として敵対的なこの世界に飛び出し、貧困、レイシズム、軍事主義に対する永遠の敵対を宣言する私たちの能力にかかっている⁴⁰。

キングにとって、アメリカ国内において「三位一体の悪」と闘う運動は、世界のいたるところで始まっている古い搾取と圧制のシステムに対する抵抗運動と根底においてつながる運動であり、同時につながる形で展開されるべきものであった。キングは、アメリカ国内の大都市におけるゲットーの問題も、一種の「国内植民地」⁴¹の問題として認識していた。奴隷制時代のプランテーションから北部大都市のゲットーに至るまで、黒人たちはずっと「声なき、力なき生活 (a life of voicelessness and powerlessness)」⁴²を強いられてきたが、それはまさしく自らの生活の自己決定権を奪われながら宗主国に収奪されてきた植民地支配下の民衆の状況そのものだったからである。しかし、そのように「声」や「力」を奪われた黒人たちは、どのようにして自らをエンパワーしつつ、「世界革命」とつながり、それを支援することができるのか。この連帯の困難については、キングも意識していた。アメリカに住む貧しき者たちは、ベトナムや中南米の国々の貧しい民衆にとっては、殺戮者であり、搾取する側だったからである。キングはこれについてどのようなヴィジョンを持っていただろうか。

3-2 非暴力による「革命」

キングは、アメリカ国内で「三位一体の悪」の構造に組み込まれた貧しき者たちの困難と危機は、国境を越えて存在する世界の収奪された者たち、搾取された者たちの問題と切り離すことができないと考えていた。キングは、1967年12月にカナダのラジオ番組で放送されたスピーチ「非暴力と社会改革」で、以下のように語っている。

西洋に生きる私たちは、貧しい国々が貧困なのは、何よりもまず、私たちが政治的あるいは経済的な植民地主義 (colonialism) によって彼らをずっと搾取してきたからだということを心に留めておかねばなりません。とくにアメリカ人は、自国に働きかけ、現代式の経済的帝国主義 (modern economic imperialism) を悔い改めさせなくてはなりません⁴³。

キングは、植民地主義は第二次世界大戦後も根本的には乗り越えられておらず、それは形を変えて新しい帝国主義さえ生み出しているという認識を持っていた。ここで、キングはアメリカの「現代式の経済的帝国主義」に言及しているが、アメリカはレイシズム、経済的搾取、軍事主義という「三位一体の悪」を国内だけでなく国境を越えて組織化していたからである。だとすれば、アメリカの黒人たちは、国内の構造の中では犠牲者のポジションに立っていても、「世界革命」(世界レベルでの脱植民地化)の文脈のなかでは、加害者としてのポジショナリティを持っていることになる。では、このような状況の中で、黒人たちは、どのようにして国境を越えた「三位一体の悪」に対抗で

きるのか。

まず、キングは、「三位一体の悪」という社会構造の根本的な変革は、暴力によってはなしえないと考えた。そもそも、「三位一体の悪」とは、他者を搾取するという不平等な社会関係を国家の暴力にも依存しつつ維持する社会構造だったが、キングは、暴力の揚棄は暴力によってはなしえないと考えたからである⁴⁴。キングは、非暴力の行動によって植民地インドを脱植民地化し「スワラジ（自立＝自律＝自由）」を実現しようとしたモハンダス・カラムチャンド・ガンディーの言葉を引用し（「手段は種であり、目的は樹木である」）、手段と目的を切り離すことは不可能であると主張したのである⁴⁵。では、社会構造は何によって変革していくのか。キングが主張したのは、ガンディーと同様、非暴力の直接行動、彼の新しい呼び名に従えば、「民衆による大規模な市民的不服従（mass civil disobedience）」だった。

民衆による大規模な市民的不服従とは、不平等・不公正な社会構造を支えることを強いられている諸個人がその社会構造を支えることを拒否するところから始まる非暴力の自律的な抵抗運動である。その背後にあるのは、ひとつの権力論である。つまり、システムの犠牲者も実はシステムを支える協力者の側面があり、その自らの協力を撤回すること（＝非協力non-cooperation）により、そのシステムを支える権力（power）を脱臼させ、変革することができるという論理である。公民権運動は、そのような権力論に立脚した運動を1955年のモントゴメリーにおけるバス・ボイコット運動以来10年以上にわたって実践しており、「声なき、力なき生活」を強いられてきた黒人たちは、このような非暴力直接行動（nonviolent direct action）を通して、自分たち自身をエンパワーしてきた。キングは、このような民衆による大規模な市民的不服従を、あらためて白人、黒人を越えた「貧しき者たち」の全国規模の持続的な大衆行動とすることによって国民と政府を動かそうとするのである。

唯一の真に革命的な人間とは、失うものを持たない人間だと言われています。この国には、失うべきものをほとんど持たないか、またはまったく持たない貧しい人々が何百万人といのです。もし、彼らが助けを得て、ともに行動に立ち上がることができれば、彼らの行動は自由（a freedom）と力（a power）を得て、それは、この国の自己満悦した国民の生活を揺さぶる新たな力（force）となるでしょう⁴⁶。

暗殺される直前の1967年の時点でキングが計画していたのは、「貧者の行進（Poor People's Campaign）」と呼ばれるワシントンDCにおける独特なデモンストレーションだった。全国から数千人規模の貧困者たちを首都に集合させ、そこに共同生活の空間を立ち上げ、貧しき人々の暮らしを全国民に可視化しつつ、政府に対して仕事と収入の権利を保障する政策を要求しようというのである⁴⁷。キングは、貧困者の苦しみを見えなくさせる「恐ろしいほど手ごたえのある分厚いガラス板」（デュボイス）を、民衆による大規模な市民的不服従による争点の「劇化（dramatization）」を通して非暴力的に突破しようとしたのだと言える。

さらにキングが認識していたのは、大規模な市民的不服従を国際化することの必要性である。先に述べたようキングは、アメリカの貧しき者たちの困難と危機は、国境を越えて存在する世界の収奪された者たち、搾取された者たちの問題と切り離すことができないと考えており、実際アメリカは、東南アジアや中南米では戦争や経済的帝国主義を展開していたからである。キングは、ベトナム戦争に対する対応としては、その戦争を恥ずべきものと考えてる若者や牧師に「良心的兵役拒否者（conscientious objectors）」となることを勧めた⁴⁸。兵役を拒否することも、ひとつの非暴力直接行動、

あるいは市民的不服従の実践だと言っているだろう。経済的搾取、レイシズム、軍事主義という「三位一体の悪」を大規模に組織化しているのは資本や国家であるが、それを実際に構成しているのは無数の個人の集合である。したがって、個人が自らの「良心」に基づいて兵役を拒否することができれば、そのシステムは「非協力」によって虫食い状態になっていく。これは、他者を「殺す」ことの拒否であると同時に、自らが「殺される」ことの拒否でもあり、国境を越えて組織化された「三位一体の悪」に対する対抗となりうる。アメリカ南部の公民権運動の発端となったモントゴメリーのバス・ボイコット運動でも、個人による市民的不服従の連鎖がきっかけとなり、民衆による大規模な市民的不服従へとつながった⁴⁹。黒人たちは、市バスへの乗車を拒否することを通して、白人至上主義の法体系や習俗への「非協力」を実践し、対抗的な社会空間と社会関係を形成すると同時に、自分の良心（conscience）や子や孫といった未来世代とも意識的につながろうとした。黒人たちには、「被害者」であると同時に「加害者」でもあるという自覚があったのである。良心的兵役拒否は、そのような活動を国際的な文脈で行うことになる。

またキングは、別のやり方で市民的不服従を国際的次元で実践することも構想した。例えば、貧しい国々の貧困の連鎖を止めるために、先進国の内部で市民的不服従を行い、政府が帝国主義的な政策をやめ、大規模な支援に着手するよう圧力をかけること、あるいは、さらに踏み込んで、相手国の民衆の運動と、政府間の枠組みを超えた「国際的な連合（international coalition）」を形成することもありうると考えた⁵⁰。中南米のような、アメリカ合衆国の関与がそもそもの問題の原因を生んでいるような場所では、それぞれの側で同時に自国の政府に圧力をかけることで事態を動かせると思った。そうすれば、武器を取りゲリラ活動に訴えざるを得ない人々を暴力から解放し、問題を非暴力的に解決できる可能性が生まれてくるというのである。

また、キングは、国連は世界の国々が世界的な規模で非暴力の方向に向かおうとしている動きだとしたうえで、その役割を重視している。キングは、非暴力とは、たんに暴力を使わないということではなく、攻撃に対しては断固として「平和的な力（peaceable power）」で対応するというものであり、国連は非暴力直接行動を使うことを検討し、この課題に立ち向かうべきだとしている⁵¹。この言及については、あいまいな部分があるが、キングは、各国の「三位一体の悪」に対抗する市民的不服従の運動が国連を通してつながり、「国際的な連合」となる可能性を考えていたと推測できる。また、キングの以下のような言葉は、キングがカント的な国家間戦争の廃絶を思索していたことを感じさせるものであり、市民的不服従の「国際的な連合」との関連でどう解釈できるか興味深い。「われわれが自分の人間性をすっかり放棄したりせず、自分自身がつくった兵器の前で恐怖や無力感に屈してしまわないかぎり、国家間の戦争と暴力を終わらせることは、貧困や人種的不正義を終わらせることと同様に可能であり、また同様に緊急のことなのである」⁵²。

4 むすびにかえて

キングは、1967年4月4日にベトナム戦争反対を明確に打ち出すスピーチをしてからちょうど1年後に暗殺されるまでの間、「非暴力（nonviolence）」だけでなく、「革命（revolution）」を最重要の言葉として使用しているように思える。キングは、共産主義には距離を取りつつも、資本主義の経済体制に対してははっきりと疑念を表明し、アメリカ社会の根本的な構造変革を訴え続けた。キングが望んだのは、資本主義の改良や進歩ではなく、「革命」だった。それが具体的に何を意味するのかは、さらなる研究が必要であるが、少なくともそれは、「社会民主主義」という言葉にはおさまりのつかないものだったと思われる⁵³。なぜなら、キングが求めた「革命」とは、民衆による大

規模な市民的不服従によって、経済的搾取、レイシズム、軍事主義という三位一体のシステムを根本的につくり変えることを意味し、植民地主義や奴隷制に起源をもつ社会構造からだけでなく国家間の戦争からも脱却しようとする構造変革だったからである。反植民地主義の思想家ガンディーが非暴力によって近代国家としての「独立」ではなく資本や国家といった「組織化された暴力」からの「自立＝自律＝自由」を目指したように、キングも、非暴力直接行動（市民的不服従）を通して実現される「もう一つの世界」を懸命に手探りしていたと思われる。確かにキングはその思想と行動を十分に深めきることなく39歳の若さで突然人生を切断されてしまった。しかし、キングが残した言葉には、「もう一つの世界は可能である」とする精神がみなぎっている。そして、それは、遠い未来にあるようなものではなく、ドアの向こう側でじっと迎え入れられるのを待っているような世界なのである。

また、キングが目を凝らし続けた「革命」のイメージは、彼のキリスト教の信仰に根差したものであった。1967年8月16日のキングのスピーチでは、聖書のエピソードをもとに「革命」のイメージが印象的に語られている。

もしよかったら、ほんの少しだけ、説教者として話をさせてほしい。ある日、ある夜のこと、一人のユダヤ教徒の議員がイエスのところにやってきた。彼は救われるために何ができるか知りたがった。イエスは、人がすべかざることに個別にふれて身動きがとれなくなったりはしなかった。イエスは、「さあニコデモよ、汝は嘘をつくのをやめなくてはならない」とは言わなかった。「ニコデモよ、汝は不義を犯してはならない」とも言わなかった。(…) イエスはまったく違ったことを言った。イエスは根本的なことを理解していたからである。人が嘘をつこうとするのなら、その人は盗もうとするだろうし、盗もうとするのなら、殺そうとするだろう。だから、イエスは個別のことに拘泥することなく、彼を見つめて、「ニコデモよ、汝はもう一度生まれ直さなければならない」と言ったのである⁵⁴。

キングは、この引用部の後、ニコデモの姿をアメリカの姿に重ね、「アメリカよ、汝はもう一度生まれ直さなければならない」と語っている⁵⁵。人間を奴隷制のなかに閉じこめるような国なら、海外でも人を経済的に搾取するだろうし、それを守るためなら軍事力をも使おうとするだろう。アメリカよ、汝はその全構造が変わらねばならないのだと。しかし、キングが引用したこのイエスの言葉は、さらに転じて、そのようなアメリカを支えている一人一人の人間にも向けられていると言ってよいだろう。「三位一体の悪」のシステムを支えているのは、「三位一体の悪」を生きる、嘘をつき、盗み、人を殺す人間であり、しかも、デュボイスの寓話の中に出て来た群衆のように、その人は、嘘をつき、盗み、人を殺していても、自分の「行為」が見えていないからである。

アメリカの黒人たちが公民権運動の中で概念的にも実践的にも発展させてきた非暴力直接行動（市民的不服従）とは、社会システムの自動運動にブレーキをかけつつ、自らの「行為」が見えていない群衆にその正体を見せようとする「装置」だったと言っていいだろう。それは、システムからわずかに身を引き剥がした人々が、自らの身体を使って、構造的暴力を支える人々に「鏡」をつきつけるのである。市民的不服従が巨大な「鏡」となって群衆を映し出すとき、群衆はどう動くだろうか。もしそこに耐えられないような自らの姿が映っていたら、人はどう振る舞うだろうか。1965年の投票権法が成立した後の白人マジョリティの巻き返し（backlash）は、そのような自省を迫られた白人マジョリティの心的防衛機制が働いた結果だったのかもしれない。人々は「汝はもう一度生まれ直さなければならない」という言葉を本当は聞いていたかもしれない。

1967年春、キングは、ベトナム反戦を明確に打ち出し、アメリカの「三位一体の悪」を正面から批判したが、そのとき同時に、自らが抱えた「三位一体の悪」についても向き合っていたのだといっているだろう。キングは、「沈黙が裏切りになるときがある」⁵⁶と述べ、沈黙を破った。「沈黙」とは、ベトナムの民衆に対する裏切りであり、国内の貧しき者たちへの裏切りであり、自らの良心に対する裏切りでもあった。「沈黙」を破ること、嘘にしがみつくとではなく、自分の「内的な真実」と対話を始めること、市民的不服従の始まりにはいつもそのような人間の営みがあるだろう。キングが「沈黙」を破ったとき、それは、ひとつの市民的不服従だったと言える。それは、群衆から自らを切り離し、それまでの自分に対して自らブレーキをかけ、自ら群衆に対して「鏡」になることだった。それは孤立ではなく、「孤独」になることであり、キングの「革命」は、そのような愛にみちた市民的不服従として始まったのである。

注

¹ 黒崎真『マーティン・ルーサー・キングー非暴力の闘士』（岩波書店、2018年）、219-220頁。

² 黒崎、173-179頁。

³ 黒崎、206-208頁。

⁴ Martin Luther King, Jr., “Where Do We Go from Here?,” *A Call to Conscience: The Landmark Speeches of Dr. Martin Luther King, Jr.* (New York: IPM, 2001), 195.

⁵ Ibid.

⁶ Ibid., 194-195. キングの「兄弟愛の王国」という用語（概念）にはジェンダーの観点からの批評がなされなくてはならないが、これについては稿を改めて論じる。

⁷ キングは、相互に結びついた「三つの悪」を、このスピーチでは、「相互に関連する三位一体の悪（the triple evils that are interrelated）」と呼び、別のスピーチでは、「レイシズム、実利主義、軍事主義からなる巨大な三つ組み（the giant triplets of racism, materialism, and militarism）」とも呼んでいる（Martin Luther King, Jr., “Beyond Vietnam,” *The Radical King* (Boston: Beacon Press, 2015), 214）。いずれにせよ、これらは、複数の別種の暴力のシステム（資本主義を土台にした経済的搾取という構造的暴力、国家を土台にした軍勢力・警察力による直接的暴力、レイシズム言説を土台にした文化的暴力）が相互に結びつき一体のものとして機能していることを表現した用語である。本稿では、“the triple evils”の訳語として、辻内鏡人・中條献『キング牧師』（岩波書店、1993年）のなかで使われている訳語「三位一体の悪」を採用する（177頁）。

⁸ Martin Luther King, Jr., *Where Do We Go from Here: Chaos or Community?* (Boston: Beacon Press, 2010), 73.

⁹ Ibid., 76.

¹⁰ Ibid.

¹¹ Ibid.

¹² Ibid.

¹³ Ibid., 77.

¹⁴ Ibid., 77-79.

¹⁵ Ibid., 79.

¹⁶ 南北戦争後の「南部の再建」と新たな制度的黒人差別の展開については、本田創造『アメリカ黒人の歴史』（岩波書店、1991年）を参照。

¹⁷ 黒人の排除は、教会、学校、住宅、仕事、レストランのほか、ほとんど全ての公共交通機関、スポーツと娯楽、病院、保育所、刑務所、収容所、葬儀場、死体置き場、墓地にまで及んだ。詳しくは、C. Vann Woodward, *The Strange Career of Jim Crow* (Oxford: Oxford University Press, 2002) を参照。

¹⁸ King, *Where Do We Go from Here?*, 113. キングは、南北戦争後の南部のプランテーションを「新しい形態の奴隷制度」として言及している。

¹⁹ King, *Where Do We Go from Here?*, 122.

²⁰ Ibid., 123.

²¹ Ibid.

²² Ibid., 118.

²³ Ibid.

- 24 Ibid., 127.
- 25 黒崎、182頁。
- 26 King, "Beyond Vietnam," 202.
- 27 Ibid., 206.
- 28 Ibid., 203.
- 29 Ibid., 211.
- 30 Ibid., 206-207.
- 31 Ibid., 207.
- 32 Ibid., 203.
- 33 Ibid.
- 34 Ibid., 204.
- 35 King, *Where Do We Go from Here?*, 7.
- 36 アレン・ネルソン (Allen Nelson, 1947-2009) の自伝『「ネルソンさんあなたは人を殺しましたか？」ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」』(講談社文庫、2010年)には、ニューヨークのブルックリンの母子家庭に生まれ育った黒人青年ネルソンが高校中退後、貧困から抜け出すために海兵隊に入隊した経緯が語られている。彼は、入隊後人生で初めて1日3度の食事を食えることができたという。また、自伝では、海兵隊の訓練においてベトナムの民衆を「グークス (gooks)」(「汚らしいもの」の意) という蔑称で呼ぶよう教育されたことが語られている (57頁)。
- 37 King, "Beyond Vietnam," 213.
- 38 Ibid.
- 39 キングは米企業と米軍による世界的な展開を「新植民地主義 (neo-colonialism)」という用語でも読んでいる (King, *Where Do We Go from Here?*, 185)。
- 40 King, "Beyond Vietnam," 215-216.
- 41 King, "Where Do We Go from Here?," 179.
- 42 Ibid., 185.
- 43 Martin Luther King, Jr., *The Trumpet of Conscience* (San Francisco: Harper & Row, 1989), 62.
- 44 Ibid., 71.
- 45 Ibid. ガンディーの思想については、以下を参照のこと。拙稿「非暴力直接行動を再導入するーガンディーと私たちの未完の脱植民地化」『国際地域研究論集』第5号 (2014年)、89-111頁、及び拙稿「非暴力の力とは何かーガンディーのサッティヤグラハから考える」細井保編著『20世紀の思想経験』(法政大学出版局、2013年)、182-211頁。
- 46 Ibid., 60.
- 47 Ibid., 60-61.
- 48 King, "Beyond Vietnam," 212-213.
- 49 モントゴメリーのバス・ボイコット運動については、Juan Williams, *Eyes on the prize: America's Civil Rights Years, 1954-1965* (New York: Penguin, 2013) ; Martin Luther King, Jr., *Stride toward Freedom: The Montgomery Story* (Boston: Beacon Press, 2010) 及び拙稿「非暴力直接行動とは何かーモントゴメリーのバス・ボイコット運動から考える」小林憲二編著『変容するアメリカ研究のいまー文学・表象・文化をめぐって』(彩流社、2007年)、307-327頁を参照せよ。
- 50 King, *The Trumpet of Conscience*, 63.
- 51 King, *Where Do We Go from Here?*, 195.
- 52 Ibid.
- 53 辻内鏡人・中條献は、『キング牧師』のなかで、キングは「スウェーデンのような社会民主主義を念頭において、既存のアメリカ社会を厳しく否定した」と述べている (187頁)。また、黒崎真は、『マーティン・ルーサー・キング』のなかで、キングはあるべき社会の1つの可能性を「北欧型の社会民主主義」に見ていたとしている。どちらの著作も豊富な資料と精緻な考察に基づいたすぐれた著作であり、私自身そこから多くのことを学んでいるが、両者の結論に関しては違和感がある。「社会民主主義」的な国家になることが、はたしてキングが語る意味での「革命」になるだろうか？
- 54 King, "Where Do We Go from Here?," 195.
- 55 Ibid.
- 56 King, "Beyond Vietnam," 140.

参考文献

- 福本圭介 (2007). 「非暴力直接行動とは何か—モンゴメリーのバス・ボイコット運動から考える」 小林憲二編著『変容するアメリカ研究のいま—文学・表象・文化をめぐって』彩流社.
- (2013). 「非暴力の力とは何か—ガンディーのサットィヤーグラハから考える」 細井保編著『20世紀の思想経験』法政大学出版局.
- (2014). 「非暴力直接行動を再導入する—ガンディーと私たちの未完の脱植民地化」『国際地域研究論集』第5号.
- 本田創造 (1991). 『アメリカ黒人の歴史』岩波書店.
- King, Martin Luther, Jr. (1989). *The Trumpet of Conscience*. San Francisco: Harper & Row. (2000). 中島和子訳『良心のトランペット』みすず書房.
- (2001). Where Do We Go from Here? In Carson, Clayborne and Shepard, Kris (Eds.) *A Call to Conscience: The Landmark Speeches of Dr. Martin Luther King, Jr.* New York: IPM. (2003). 梶原寿監訳『私には夢がある—M・L・キング説教・講演集』新教出版社.
- (2010a). *Where Do We Go from Here: Chaos or Community?* Boston: Beacon Press. (1999). 猿谷要訳『黒人の進む道—世界は一つの屋根のもとに』明石書店.
- (2010b). *Stride toward Freedom: The Montgomery Story*. Boston: Beacon Press. (1959). 雪山慶正訳『自由への大いなる歩み—非暴力で闘った黒人たち』岩波書店.
- (2015). Beyond Vietnam. In West, Cornel (Ed.) *The Radical King*. Boston: Beacon Press.
- 黒崎真 (2018). 『マーティン・ルーサー・キング—非暴力の闘士』岩波書店.
- ネルソン, アレン (2010). 『ネルソンさん、あなたは人を殺しましたか?—ベトナム帰還兵が語る「ほんとうの戦争」』講談社.
- 辻内鏡人・中條献 (1993). 『キング牧師—人種の平等と人間愛を求めて』岩波書店.
- Williams, Juan. (2013). *Eyes on the prize: America's Civil Rights Years, 1954-1965*. New York: Penguin.